



『悲しむ者の幸い』

聖書箇所：マタイ 5：4

序)

皆さん、こんにちは。友愛キリスト教会の新井と申します。

早速ですが、今日は皆さんと聖書の中でも非常に有名な「山上の説教」の中にある「悲しむ人々は、幸いである、／その人たちは慰められる。」という教えを、詳しく見て行きたいと思います。

本論)

ところで、今日の箇所を考えるにあたってまず初めに押さえておきたいことは、ここで言われている「幸いである」という言葉の意味です。

じつは、この「幸いである」という言葉には、感動や感激を表すニュアンスが、強く含まれています。

つまり、この箇所でイエス様が語られた「幸いである」という言葉は、単なる諺や格言のような言葉ではなく、心の底からあふれ出る、抑えることのできないような深い感動を表す言葉であることを、ぜひ覚えたいと思います。

そしてイエス様は、聖書の別の箇所では、「その喜びをあなたがたから奪い去る者はいない。」と約束をしておられます。

そこで、ある人は次のように述べています。

イエス様が私たちに教えている「喜び」とは、苦痛の中にも、なお心に満ちる喜び。また、悲しみや損失、痛みや嘆きによっても、消すことができない喜び。それは、涙のうちに輝く喜びであり、死でさえも奪い去ることのできない喜びであると。

それでは、今日の聖書の言葉を詳しく見て行きましょう。

この「悲しむ人々は、幸いである。」という言葉には、一見すると、文字通りには受け取ることのできないような、皮肉な響きがあります。

しかし、もちろんイエス様は、ここで何も皮肉を述べている訳ではありません。

とは言え、ここで使われている「悲しむ」という言葉は、極度の悲しみ、人間の最も強い悲しみを表す言葉であると言われています。

例えば、それは愛する人を失い、狂わんばかりに嘆く、そのような悲しみを意味しています。

ですから、そのような者が「幸いである」というのは、大変理解に苦しみます。

しかし意外なことに、この「教え」は、キリスト教の歴史の中でも、特に人々に愛されてきた教えの一つであると言えます。

それは昔の人々が、この「教え」の意味を、「人生の中で、深い悲しみを経験し、それを耐え抜いた

人は、幸いである」という意味に理解していたからです。

つまり、こういうことです。

日照りばかりが続いては、作物は育ちません。

それと同じように、悲しみの中でしか、経験することのできない恵みがあるのだと、人々は考えました。

そしてそれは、真理であると思います。

また、ある人の考えによれば、「深い悲しみ」は、私たちに二つの恵みをもたらすと言われています。

第一に、「深い悲しみ」は、何にもまして、人々の同情、また、慰めてくれる友人の有り難さが実感されるという恵みを、私たちにもたらします。

第二に、「深い悲しみ」は、慰めと憐れみに満ちた、神様御自身を見出すという恵みを、私たちにもたらします。

つまり、私たちは深い悲しみの中でこそ、人生の深みに漕ぎ出し、真理を見出すことができるのだということです。

そして私たちは、今、そのことを多くの「悲しみの証人たち」から、確認することができます。

というのは、今、様々な書物やSNSなどを通して、私たちに深い慰めを与え、また、良い導きを与えてくれる人々の多くは、その人生に大きな痛みや、悲しみを抱えている人々であるからです。

つまり私たちが、私たち自身の「深い悲しみ」を、正しい態度で受け止めるなら、新しい力と美しい魂が与えられるということは、真理なのです。

そして、すべての真理は、聖書が証する神様のもとに、私たちを導いてくれるものでもあります。

また、この「教え」について、次のように理解している人々もいます。

それは、「自分自身の深い悲しみの経験から、人を愛すること、また、同情することを学んだ人は、幸いである」というものです。

さて、19世紀のイギリスで活躍した、有名な社会改良家の一人に、シャフツベリー伯爵という人がいます。

そして伯爵が、特に貧しい労働者や、その子どもたちのために尽くした動機は、彼が子どものときに経験した、次のような出来事にあったと言われています。

ある日、シャフツベリー少年が町を歩いていると、貧しい労働者のお葬式に行き合わせました。

手押し車に粗末な棺桶が載っていて、それを酔っ払った男たちが、下品な歌を歌いながら押していました。

そしてその葬列が、坂道に差し掛かったとき、棺桶が滑り落ち、棺桶は壊れて中身が、つまり亡骸(なきがら)が露(あら)わになりました。

ある人は、その光景を見て滑稽だと思ったかもしれません。

またある人は、気味が悪いと言って顔を背けたかもしれません。

しかしシャフツベリー少年は、それを見て、私が大きくなったら、こんな事が再び起らないようにするために、生涯を捧げよう」と自分に誓ったと言います。

そして伯爵は、実際、彼の同胞を助けるために、その一生を捧げ尽くしました。

さて、イエス様は今日の個所で、そのような人こそが、『幸いである』と教えておられるのではないのでしょうか。

つまり、「隣人の深い悲しみに同情して、自分自身も同じように深く悲しむことのできる人は、幸いである。」なぜならば、そのような人は、隣人を心から慰めることができ、また、そのことによって、自分自身も深く慰められるからである。

ところで、聖書の別の個所には、次のようにも書かれています。

「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。(ローマ 12 : 15)」

願わくは、皆さんが、そのような人となり、また、そのような良い友人を持つことができますように。

掲載元：[中部学院大学・中部学院大学短期大学部_チャペルアワー](#)